

# 人生成り行き任せ，成せばなり， 世界核医学会

絹谷 清剛

*Kinuya Seigo*

(金沢大学医薬保健研究域医学系核医学)



核医学の世界に身をゆだねてから36年目となりました。私が医学部に進んだのは、私の大学卒業の年に身罷った父の希望でした。核医学教室に加わったのは、恩師久田欣一金沢大学核医学診療科初代教授から、1対1で放射免疫療法（放射能標識抗体による核医学治療）の講義を受けたことによります。大学院最終学年の年にChang H Paik先生（米国国立衛生研究所Radiochemistry）が金沢に来られた際に、誰か人を出してほしいと希望され、私の与り知らぬところで留学が決定しました。20年目、先代利波紀久教授の退官に際し、病棟・外来業務をこなしつつ実験をする体力がなくなったことを自覚していたため、大学を辞することを考えていたところが、教室を主宰することとなりました。学会理事会に参加した際は、核医学治療を専門とする人間として、治療に関わる諸々の担当となりました。2013年に、世界核医学会主催を取りに行くと理事会が決定し、私が誘致活動責任者として指名されました。その後、全国の若者たちの力を借りつつ誘致活動を行い、誘致成功となり、本年9月7～11日に京都国際会館で開催するにいたりました。振り返って思うに、すべて自らが欲したのではなく、成り行き任せでありました。

世界核医学会（World Federation of Nuclear Medicine and Biology, WFNMB）の大会は1974年の第1回大会（東京・京都）から4年毎に開催され、今年、約半世紀ぶりに日本に帰ってきます。それゆえ、“Summarize the past half century and Discuss the next half century of WFNMB”といううたい文句で誘致活動を行いました。日本語テーマ“核医学の過去・未来を語る！”はそれにあやかっただけです。活動中は、世界の核医学関連主要学会、アジアのローカル学会等を駆け回り、その間、全国の若者達が力を貸してくれました。ブースでは法被を羽織ってお祭り状態、ガラディナー等では皆で浴衣を着たり、私は紋付き袴姿でステージ挨拶をしたりと、海外の人たちの目を引きつけるために行ったことですが、自ら楽しんでいました。bid paperでは、関係省庁の大臣・長官、関連企業代表、全国のアカデミアの学長・研究科長、京都・石川の知事・市長、アジア各国学会理事長からサポーターをいただき分厚く添付しました。選挙当日にプレゼンがありました。年をとってからは発表練習等一切しないようになっていますが、この時ばかりは、ストップウォッチで時間を計りつつ、数十回練習しました。このような諸々の甲斐あって、バンクーバーに21対20の1票差で開催を獲得できた次第です。

世界核医学会は第13回を迎え、第62回日本核医学会学術総会・第42回日本核医学技術学会総会学術大会との併催で実施されます。開会式には、ノーベル賞受賞者の田中耕一先生をお迎えすることとなっています。腫瘍・循環器・脳科学の3テーマで、世界の話題テーマが議論されます。また、日本の総会ではお目にかかれないテーマのセッションがWFNMB, IAEA, WHOから提案されています。プログラムの公開をご期待ください。日本の総会の方のみの登録の方にも、総会3日間は世界核プログラムに参加可能なこととして組み立てていますので、若い人々には、世界の雰囲気を感じてほしいと思います。

世界核医学会と併催のため、申し訳ないことですが、例年より登録費を若干上に設定させていただきます。しかし、皆さんに損はさせない心意気で、実行委員一同準備を進めています。コロナが収束し、皆さんと京都でお会いできることを祈念しております。